【著書論文目錄】（自昭和二十四年九月至同年十二月）

國史關係（著書）

日本史教育の理論と實際　和歌森太郎著（B6・三二〇頁・小石川書房・一九〇圓）

新日本史概說　奈良本辰也編著（B6・三二二頁・蘭書房・二〇〇圓）

日本史研究資料—上卷　京都大學日本史學研究會編（A5・一七八頁・羽田書房・二五〇圓）

日本史概說　坂本太郎著（A5・三五〇頁・至文堂・二三〇圓）

日本經濟史　中村吉治著（B6・三六二頁・角川書店・二九〇圓）

日本經濟史　堀江保藏著（A5・三二二頁・東洋書館・三二〇圓）

新國史觀卷九—近世農村社會史論—中村孝也著（B6・三三六頁・雄山閣・三〇〇圓）

新稿日本史　和歌森太郎著（B6・四五〇頁・有精堂・二三〇圓）

日本民族社會史第三卷　村山節著（B6・二七七頁・高山書院・二〇〇圓）

アジア的生產樣式論　服部・伊豆・尾崎・秦共著（B6・三九〇頁・白揚社・二八〇圓）

古往來についての研究—上世・中世における初等教科書の發達—石川謙著（B6・五二〇頁・講談社・一二〇〇圓）

法隆寺の研究史　村田治郎著（A5・三四〇頁・每日新聞社・三三〇圓）

日本上代繪畫史　春山武松著（B5・三三二頁・朝日新聞社・七五〇圓）

日本文化の形成　上代　小泉榮一著（A5・三四八頁・同學社・三六〇圓）

下剋上の社會　鈴木良一著（B6・一五〇頁・三一書房・一一〇圓）

日本商人史（中世編）豊田武著（B6・二七〇頁・東京堂・二五〇圓）

南北朝史論　村田正志著（A5・三九八頁・中央公論社・四〇〇圓）

日本藝能史講話　小宮・久松・能勢共著（A5・二〇〇頁・紫乃故鄕舍・二五〇圓）

日本の古文書上卷　相田二郎著（A5・一一二四頁・岩波書店・八〇〇圓）

日本資本主義の生成とその基礎　小林良正著（A5・二六〇頁・日本評論社・二五〇圓）

日本のマニュファクチュア問題　堀江英一著（B6・一二一頁・三一書房・九〇圓）

日本資本主義發達史年表　岡崎・椙西・倉持編（A5・四四八頁・河出書房・六五〇圓）

近世農業經營史論　戸谷敏之著（A5・五二九頁・日本評論社・五五〇圓）

日本資本主義の構造　平野義太郎著（A5・二九二頁・日本評論社・三五〇圓）

日本農業經濟史研究(下)　小野武夫博士還曆記念論文集（A5・二一一頁・日本評論社・二三〇圓）

山村の構造　古島敏雄著（A5・三〇四頁・日本評論社・三〇〇圓）

日本近代化と福澤諭吉　中村菊雄著（B6・二〇二頁・改造社・一六〇圓）

自由民權家とその系譜　田中惣五郎著（B6・國土社・一八〇圓）

日本近世の文化改革　福本和夫著（B6・二四〇頁・潮流社・一七〇圓）

日本における三年間(上)　オールコック著　山澤種樹譯（A5・三六九頁・講談社・三五〇圓）

近代日本教育の成立—明治教育史—玉城肇著

（B6・二六七頁・季節社・一八〇圓）
日本ファシズムの諸問題　淺田光輝・中村秀一郎共著（B6・二五〇頁・岩崎書店・一八〇圓）
日本共產主義運動史　山本勝之助・有田滿穗共著（B6・四五〇頁・彰考書院・二五〇圓）
明治大正反戰運動史　松下芳男著（B6・二七四頁・草美社・一六〇圓）
日本地方財政發展史　藤田武夫著（A5・七〇〇頁・河出書房・一〇〇〇圓）
現代史えの反省　田中惣五郎著（B6・二〇六頁・文理書院・一五〇圓）
東條政權の歷史的後景　服部之總著（B6・一二八頁・自揚社・一七〇圓）

【雜誌論文】

一橋論叢　二二ノ三（昭廿四、九）　服部　一馬
日本漁業近代化の基底
經濟評論　四ノ一二（昭廿四、十二）　山崎　隆三
絕對主義の新しい展開
經營と經濟　二九ノ二―三（昭廿四、九――十二）
明治憲法史の一斷面（五）・（六）　西口　照男
國史學　五一（昭廿四、十）
日米通商條約の調印に關する一考察（上）　藤井　貞文
刀禰の先驅的一形態　岩澤　愿彥
近世古注學の復興―折衷學の本質―　山本　武夫
歌史拾露（資料紹介）　辻　彥三郎
史學　二四ノ一（昭廿四、十）
國史に於ける變革とその主動者　松本　芳夫
古代日本人の世界觀についての一考察　淺子勝二郎
史學雜誌　五八ノ四（昭廿四、十）
中世末期に於ける商業桝の社會經濟史的意義　寶月　圭吾
律邊拾遺　佐藤　進一
同　五八ノ五（昭廿四、十一）　家永　三郎
思想史學の立場
同　五八ノ六（昭廿四、十二）　笠原　一男
一向一揆の本質
史迹と美術　一九六（昭廿四、九）　毛利　久
唐招提寺私考（下）
同　一九七（昭廿四、十）　近藤　喜博
彫尙型天神像について
廣隆寺の別號秦公寺と太秦寺に就いて（上）　向井　芳彥
尾形光琳乾山に關する一資料　石田　一良
下野那須郡の板碑　渡邊　龍瑞
同　一九八（昭廿四、十一）　石田　茂作
正倉院建築論再攷
法隆寺五重塔の建築年代（上）　藪田嘉一郎
廣隆寺の別號秦公寺と太秦寺に就いて（下）　向井　芳彥
同　一九九（昭廿四、十二）　藪田嘉一郎
法隆寺五重塔の建築年代（下）
東大寺二月堂建築考　黑田　昇義
思想　三〇三（昭廿四、九）　川島　武宜
封建的契約とその解體（下）
同　三〇四（昭廿四、十）　服部　之總
大隈重信
同　三〇五（昭廿四、十一）　福本　和夫
日本農業資本主義研究の基本構造
社會構成史體系　第三回（昭和廿四、九）
封建社會における資本の存在形態

同　第四回（昭廿四、十一）　堀江　英一
近世における階級闘爭の諸形態　林　基
同　第五回（昭廿四、十二）
近世における農民層の階級分化　藤田　五郎
自由民權と絶對主義　信夫清三郎
新日本史講座　第七回（昭廿四、十）
原始時代の社會と文化　八幡　一郎
封建時代前期の宗教　村山　修一
幕府論　佐藤　進一
商業資本及び高利貸資本　樺西　光速
資本主義時代の産業經濟　宮本　又次
同　第八回（昭廿四、十二）
古代前期の社會と政治　竹内　理三
西洋との接觸　笹内　健次
封建時代後期の文化　岩城　隆利
議會政治の發展　上杉重二郎
經濟恐慌　大島　清
世界　四五（昭廿四、九）
張作霖・楊宇霆の暗殺　森島　守人
―「日本外交の回想」(一)―
同　四六（昭廿四、十）
陰謀・爆藥・軍刀
―「日本外交の回想」(二)―　森島　守人
下積みの人間への盡きない愛　小田切秀雄
―「日本の下層社會」―
同　四七（昭廿四、十一）
運命の七月七日　森島　守人
―「日本外交の回想」(三)―
同　四八（昭廿四、十二）
聖者の胃袋　松本新八郎
潮流　一〇（昭廿四、十）
北一輝と井上日召　田中惣五郎
―日本ファシズムの呪的權威信仰
展望　四五・四六（昭廿四、九・十）
シャビエル渡來後の十年間(上)(下)　和辻　哲郎
同　四七（昭廿四、十一）
京都開拓　和辻　哲郎
天理大學學報　一ノ二・三（昭廿四、十）
わが國近世の家族における家父長的支配
―主として近世文藝を通じて見たる―　姫岡　勤
日本評論二四ノ九（昭廿四、九）
「大日本帝國主義」政治史覺え書
―第一議會から第七議會まで―　服部　之總
日本歷史　十九號（昭廿四、九）
世界史上の台灣　岩生　成一
ツシマの歷史的位置　中村　榮孝
日本民家の變遷　藤田　元春
原始時代―日本史基礎講座第一講―　樋口　清之
同　二十號（昭廿四、十一）
生類憐みの令に就いて　古田　良一
惱める人々への奉仕(上)―忍性の社會活動―　中村　元
神功皇后は果して架空の人物か　植村　清二
日本銀行の成立に關する一考察　七海　吉郎
古代(上)―日本史基礎講座第二講―　家永　三郎
同　二十一號（昭廿四、十二）
町座の成立に就いて　赤松　俊秀
町人の擡頭　永島福太郎
資本主義的企業の成立と商人及新人　宮本　又次
古代(下)―日本史基礎講座第三講―　竹内　理三
惱める人々への奉仕(下)　中村　元

近世における日本商法發達史概觀　野津　務
文化　一七ノ九（昭廿四、九）
神話的國史の成立過程
—古事記の史的位置についての再分析—　梅澤伊勢三
文學　一七ノ九（昭廿四、九）
自然主義の社會的基礎　信夫清三郎
宮廷女流文學の問題(二)　西郷　信綱
同　一七ノ一〇（昭廿四、十）
特輯變革期の歴史と文學
日本の〃英雄時代〃と六・七世紀の文化　川崎　庸之
英雄敍事詩への道　西郷　信綱
玉葉にみる治承四年　松本新八郎
中世文學への繼承　小田切秀雄
元祿時代の歴史的意義についての覺書　林　基
近代文學形成の歴史的前提　遠山　茂樹
近代文學の二つの源泉について　まつしま・えいいち
同　一七ノ一（二昭廿四、十二）
戯作・その傳統　小田切秀雄
唯物論研究　六（昭廿四、九）
「日本資本主義論爭史」の方法　栗城　元一
日本型アアシズム論の史的考察　島村　和彦
横濱大學論叢　一ノ一・二・三（昭廿四、十一）德川封建制の崩壞過程　安彦孝次郎
初期庄園の勞働力について　舟越　康壽
立命館大學論叢　五二・五三・五四（昭廿四、十）
中世の藝能と民衆生活
—民衆藝術とその傳統の問題—　林屋辰三郎
近世史研究の諸論點　岩井　忠熊
歴史學研究　一四一（昭廿四、九）
動向　古代史の二つの問題
アジヤ的生產樣式の清算　布村　一夫
「親族共同體」の理論について　井上　清
同　一四二（昭廿四、十一）特輯歴史學と隣接科學
民俗學と歴史學　古島　敏雄
法史學の方法と課題について　永原　慶一
民族學に對する歴史研究家としての若干の要望　藤間　生大
幕末政爭の一考察
—土佐藩を中心として—　原口　清
三宅雪嶺著「同時代史第一卷」（書評）　遠山　茂樹
—史論史學への鄉愁—
古代文學史における〃英雄時代〃の問題（書評）　川崎　庸之
歴史學研究　別冊（昭廿四、十二）
「世界史の基本法則」
原始・古代社會における基本的矛盾について　松本新八郎
封建社會における基本的矛盾について　高橋幸八郎
資本主義社會の一般的危機について　鹽田庄兵衛

東洋史關係〔著書〕

孫文より毛澤東へ（アテネ文庫）岩村三千夫著（六〇頁・弘文堂・三〇圓）
中國勞働運動史下卷　鹽脇幸四郎著（A5・四五二頁・白揚社・二二〇圓）
原始儒家思想と經學　重澤俊郎著（A5・二九四頁・岩波書店・三八〇圓）
中國思想史　清水良信著（B6・四三三頁・

明治圖書・三五〇圓）

世界史東洋史編　三上次男著（A5・二〇一頁・中等教科書出版社・一九〇圓）

日本華僑社會の研究　內田直作著（A5・三九三頁・同文館・五〇〇圓）

中國社會の基本問題　尾崎秀實著（B6・三〇六頁・世界評論社・二五〇圓）

中國古代哲學史　鈴木大拙著志村武譯（A5・二二四頁・新潮社・二〇〇圓）

朝鮮歷史讀本　林光澈著（A5・三四〇頁・白揚社・三〇〇圓）

世界の歷史Ⅲ東洋　仁井田陞・野原四郎・松本善海・增井經夫著（B6・三九九頁・每日新聞社・二二〇圓）

中國大革命　平野義太郎著（B6・一四八頁・ナウカ社・一〇〇圓）

アジア的生產樣式論　伊豆公夫・岡本三郎・服部之聰・尾崎庄太郎・秦玄龍著（B6・三八三頁・白揚社・二八〇圓）

印度中世精神史上　金倉圓照著（A5・三八〇頁・岩波書店・四二〇圓）

東洋史ノート　永井算巳著（B6・二六〇頁有明書房・一八〇圓）

漢の武帝（岩波新書）吉川幸次郎著（二三二頁・九〇圓）

【雜誌論文】

經濟論叢　第六十四卷一・二・三號（九月）

中國史上に於けるインフレーションについて　穗積　文雄

史學研究　第一集（十月）

西歐東漸の跡を顧みて　佐伯　好郎

中國に影響を及ぼせるビルマの戲樂　杉本直治郎・御手洗　勝

史學雜誌　第五十八編四號（十月）

華北の農村に於ける「開業子」の慣行—村落共同體的關係への再檢討—　旗田　巍

同　五號（十一月）

遼代の絹織物業　島田　正郎

華北先史土器の一考察—特に灰陶と黑陶について—　關野　雄

思索　第二十九號（十二月）

中華人民共和國を解剖する　竹內　好

社會構成史大系　第三回（九月）

古代諸思潮の成立と展開　重澤　俊郎

同　第四回（十一月）

東南アジア社會の一類型—インドネシア社會構成史—　小林　良正

同　第五回（十二月）

中國回教社會の構造（上）　岩村　忍

世界　第四十七號（十一月）

中國の一キリスト者の告白　幼方　直吉

中國研究　第九號（九月）

中國現代文學の發展—抗戰前後の長編小說—　小野　忍

中國人民文學の諸問題（座談會）　岡崎俊夫・小野　忍・佐々木基一・島田政雄・竹內　好・武田　泰淳

同　第十號（十一月）

中國の現狀を理解する鍵—「世界」に現われたシナ學的見解の批判—　岩村三千夫

中國革命の理解を妨げるもの　平野義太郎

魯迅を生かす道—竹內好氏の中國觀について—　幼方　直吉

新中國の對日世論　村越　等

新中國の鑛業建設　中研調査部

解放區農業の構造と農業建設　中研調査部

展望　第四十七號（十一月）

アジアの共産主義　李　荔
新中國の國際環境　岩村三千夫
東方學報　京都第十七册（十一月）
中國哲學史序說稿本　狩野　直善
羅教の成立と流傳について　塚本　善隆
學僧宗喀巴—その傳と著作目錄—　長尾　雅人
新唐書地理志の土貢について　目比野丈夫
白樂天の補逸書　平岡　武夫
狩野先生の學風　小島　祐馬
日本文化　第二十七號（十月）
蒙古文より見たる滿洲實錄の研究（一）　山崎　忠
民族學研究　第十四卷一號（九月）
巫と火—朝鮮シャマニズムにおける聖火の行事—　秋葉　隆
ハイラル・ダウール族の氏族巫　大間知篤三
滿洲族薩滿の祭祀を見て—黑河省瑷琿縣の場合—　小堀　巖
古代チュルク人における「狼頭の神」について　護　雅夫
北土の神樂—南樺太におけるギリヤーク・オロツコのシャーマン—　山本　祐弘
大月氏の太尾羊について　榎　一雄
同　第十四卷二號（十二月）
南詔・大理・民家の言語　牧野　巽
中國古代の樹木思想　關野　雄
契丹の祭祀　島田　正郎
ツングース語オロツコ方言のその近隣言語間における位置　池上　二良
瑷琿附近の滿洲族の言語について　小堀　巖
立命館文學　第七〇・七十一・七十二號（十月）
帝の觀念　自川　靜
朱家傳說とツングース文化の性格　三田村泰助
「普天率土」主義の古典的理解　平中　苓次
滝谷史壇第　三十二號（十二月）
北魏均田攷　西村　元祐
民國初期の婦女解放運動　三上　諦聽
歷史學研究　第百四十一號（九月）
古代帝國成立の一考察　西嶋　定生

【單行本】

西洋史關係　【著書】

京大西洋史5（絕對主義の時代—近代國家の生成—）前川貞次郎著（A5・一一七頁・九〇圓・創元社）
京大西洋史6（近代民主政治の發展）豊田堯著（A5・一四四頁・一〇〇圓・創元社）
西洋史提要　村川堅太郎著（A5・二五六頁・二三〇圓・秀英出版）
西洋文明小史　林健太郎著（B6・二〇一頁・一五〇圓・千代田書房）
歷史研究の方法　シャーマンケント著・宮崎譯（B6・二六六頁・二〇〇圓・建設社）
歷史の研究I　トインビー著、蠟山・阿部譯（A5・二九〇頁・四一〇圓・社會思想研究會出版部）
世界史の基本法則　歷史學研究會編（A5・八〇頁・一〇〇圓・岩波書店）
經濟學研究の栞—西洋經濟史編—　東京商大一橋新聞部編（B6・二六〇頁・二〇〇圓・春秋社）
サリカ法典　久保正幡譯（A5・二二八頁・三二〇圓弘文堂）
農民解放の史的考察　社會經濟史學會編（A5・二二六頁・一八〇圓・日本評論社）

ニーバーのマルクス主義批判　山本新（B6・二五〇頁・一六〇圓・黎明社）
創造的平和―クエーカーの思想とその實踐―　岩橋武夫（B6・一五四頁・一四〇圓・同文館）
イギリス産業革命社會史研究　五島茂著（四三〇圓・日本評論社）
社會の概念と運動法則　シュタイン著・猪木譯（B6・二五〇頁・一五〇圓・みすゞ書房）
ドイツ共産黨史　猪木正道著（B6・一六四頁・一四〇圓・弘文堂）
第二次大戰回顧錄3　チャーチル著・毎日新聞飜譯委員會譯（B6・二八六頁・三五〇圓・毎日新聞）
英國社會史(上)　トレヴェリアン著・林譯（A5・三二四頁・三八〇圓・山川出版社）
ラテンアメリカ史(下)　田中耕太郎著（A5・三八七頁・五〇〇圓・岩波書店）
民主々義革命の理論　信夫清三郎著（B6・二〇五頁・一三〇圓・唯物論研究所）
科學の歴史　岡邦雄著（B6・一二七頁・九〇圓・ナウカ社）
宗教改革と近世科學　末綱恕一（B6・八三頁・六〇圓・法藏館）

【雜誌論文】

史淵　第四十一輯（十月）
ジョン・ロックとアメリカ革命　江口　朴郎
人文研究　第一卷第一號（十一月）
英國に於けるヴォルテール　益田　道三
一橋論叢　第二十二卷第五號（十一月）
カメラリスムス成立期の「財政」　木村　元一
天理大學學報　第一卷第二・三號（十月）
ヘレニズムとヘブライズム　西谷美智雄
史學雜誌　第五十八編第五號（十一月）
ヴァジニア邊境農民の抗爭―アメリカ民主々義發達の一段階―　中尾　健一
史林
アリストテレス「ピュテイア優勝者錄」とデルポオイの碑文　栗野頼之祐
歴史學研究　第一四二號（十一月）
アメリカ社會＝人類學―とくにその文化概念について―　本田喜代治
第一四三號（一月）
ビスマルクと帝國主義　江口　朴郎
人文學科研究　第七號（十一月）
産業革命と勞働者　小松　芳喬
經營と經濟　第五十三號（十一月）
カルビニズムと英國中世後期の經濟思想　重藤　威夫
新潮　一月號
歴史家の反省　鈴木　成高
國家學會雜誌　第六三卷第七・八・九號
基本的人權先史　原田　慶吉
經濟論叢　第六十四卷第四・五・六號（十二月）
第一次大戰後の外資輸入　堀江　保藏
初期獨占　堀江　英一
第六十五卷　第一號（一月）
社會政策論爭史の一齣(一)　岸本英太郎
世界　二十五年一月號
クリオの顔　ノーマン

地理學關係　【著書】

日本の農業―その經濟地理學的研究―　西水孜（スガイ）郎著（古今書院・昭和二十四年十一月・A5五二〇頁・六五〇圓）
新しい日本と世界4、衣料と住居はいかにし

て出來るか。石田龍次郎編（毎日新聞社・昭和二十四年十月・B5・一二八頁・二〇〇圓）

現代の地誌學　能登志雄著（古今書院・昭和二十四年・八〇圓）

日本統計年鑑　總理府統計局統計委員會編（毎日新聞社・昭和二十四年十月・B5・一〇九〇頁・二八〇〇圓）

生物社會の論理　今西錦司著（毎日新聞社・B6・二五八頁・一七〇圓）

【雜誌論文】

地理學評論　第二十二卷第六・七合併號

東四國山地における耕地の高度分布　岸本　實

疾病地理學の方法論—脚氣の分析過程を中心として—　籾山　政子

志摩隆起海蝕台　吉川　虎雄

山間における日照、日射と住家分布—飛彈小八賀川流域について—　高橋　百之

地震學と人文地理學　宮村　攝三

地理學評論　第二十二卷第八號

茨城縣に於ける赤痢の疾病地理學的研究　堀口　友一

大興安嶺地帶の地下凍結　千葉　德爾

破壞された都市景觀の再編現象—仙台の例—　田邊　健一

本邦各地の雨量推移の特性について　矢澤　大二

地理學評論　第二十二卷第九號

日本に於ける脚氣の疾病地理學的研究（第2報）　籾山　政子

牧の原附近の屋敷森（1）　栗林　澤一

氣候表現に於ける水分平衡の問題　關口　武

わが國附近の天氣圖に用いらるべき圖法の選擇について　野村　正七

人文地理　第四號

「人文地理」の編集の方式と目的　石田龍次郎

社會科としての人文地理の指導　保柳　睦美

社會科の授業における「綜合的授業」について　別技　篤彦

地理教育の現段階　佐々木清治

中等學校カリキュラムを通してみたるアメリカ地理學及地理教育　辻田右左男

隱岐島の地理的性格　谷岡　武雄

吉野川南岸山地の集落と土地利用　岸本　實

那古町の生活圏　齊藤　叶吉

長崎言葉の地理的性格　伏見　義夫

埼玉縣の農業　村本　達郎

昭和二十二年市郡別人口密度並に增減表　今村新太郎

社會地理　十月號（第一七號）

灌漑用水の分配と用水權に關する歷史地理的研究覺書　喜多村俊夫

安平盆地の住民入地と聚落景觀（北海信安平盆地の自然と文化景觀第二）　森　壽美衛

わが國の米作に關する二三の地域的考察　入江　敏夫

噴火前後の裏磐梯　安田　初雄

台灣の社會地理的特質の基礎　富田　芳郎

歐洲地理學界の現況　今村　學郎

社會地理　十一月號（第一八號）

日本海の沿岸航路　古田　良一

經濟的發展の地理　除野　信道

一つの文化地圖　林　知己夫
社會地理　十二月號（第一九號）
カロリー計算による土地生産力の量的表現　川喜田二郎
上信國境附近の土地利用と居住形態　矢嶋　仁吉
農村の社會構造　榊松　靜江
資源　第一號
戰後經濟と資源問題　大來佐武郎
土地評價及び可容人口論の二三に就いて　淺井　辰郎
洪水予報の知識　大道寺重雄
TVAと「河水馴化」　近藤　利八
地下資源利用の諸問題に就いて　堀　純郎
屎尿の資源處理の方向　柴田　三郎
地理調査所時報（第八集）
日本の都市の構成　小笠原義勝
地理學研究小報　第二號（立命館大學地理學同攷會會誌）
ドウマンジョンの集落論　谷岡　武雄
ハック耕　岩田　慶治
清代の陸上交通路　河野　通博
ヨーロッパの集落と農地の形態及その社會經濟的意義　水津　一朗
近江商人と座の分布　樋口　節夫
中世末期に於ける臨海村落の千拓過程の研究　松本　豊壽
木材都としての櫻井町　松田　勇治
近世交通史上にあらわれた宿驛の地理的性格第一報—里程の問題—　山崎　謹哉
潮岬の集落　河原　常男
都市圏に於ける都市構造についての二三の考察　小林　博
四國の人口密度　檀上　安男
岡山縣粒江村貝塚發掘調査概報　青木　良信
麓集落の性格についての一考察　佐々木高明
佐渡島の歴史地理的性格　水谷　清三

【刊行資料】

經濟安定本部資源委員會事務局刊行資料
資源委員會資料第一號　國家政策と科學研究
同第五號　公共事事の意義
同第八號　英國の建設工業の問題
同第十一號　アイオン台風による東北地方の豪雨について
同第十三號　アイオン台風に關する資料
同第十五號　我國の人口と資源問題公聽會記事
同第十七號　日本氣象災害年表（一九〇〇—一九四七年）
大雪山神雪水量及び流出調査　安本資源委員會・北海道廳土木部・昭和二十四年七月・九〇頁
宮城縣北部迫川伊豆沼附近の開拓と水害、平重道・安本資源委員會事務局

考古學關係【著書】

登呂　日本考古學協會編（B5・一四六頁・圖版九六・毎日新聞社・二〇〇〇圓）
法隆寺の研究史　村田治郎著（A5・三四〇頁・毎日新聞社・三三〇圓）
寒暖の歴史　西岡秀雄著（A5・二〇五頁・好學社・二四〇圓）
日本上代繪畫史　春山武松著（B5・三三二頁・朝日新聞社・七五〇圓）
繩文式文化編年圖集1花輪台式文化　甲野勇・吉田格共編（A5・寫眞十枚解説付・山岡書店・一三〇圓）
續石器と土器の話　藤森榮一著（B6・一八四頁・蓼科書房・一二〇圓）

【雜誌論文】

人類學雜誌　第六十一卷　一號（九月）
出雲國猪目洞穴遺跡概報　大谷從二・大國一雄・池田次郎
栃木縣菱村普門寺遺跡發掘概報酒詰　仲男
破折端にアスファルトの附著した土偶　渡邊　仁
遺物包含地遺蹟に於ける燐の分布　田邊　義一
奈良繪本「山海異形」　渡邊　直經
齒の計測規準について　清野　謙次
台灣支那人の人類學に關する文獻　藤田恒太郎
考古學雜誌　五三の終卷號（十二月）　須田　昭義
日本考古學の課題　八幡　一郎
埋藏物と考古學　藤田　亮策
史學雜誌　五八ノ五（十一月）
華北先史土器の一考察　關野　雄
史學　二四ノ一（十月）
彌生式土器と朝鮮の土器　藤田　亮策
歷史學研究　第一四二號（十一月）
アメリカ社會＝人類學—とくにその文化概念について—　本田喜代治
民族學研究　第十四卷二號（十二月）
中國古代の樹木思想　關野　雄
日本考古學　第一卷六號（十二月）
茨城縣下玉里貝塚略報　（酒詰　仲男　廣瀨　榮一）
東京都仙台坂貝塚發掘報告　（掘田　正祥　田賀　英一　岡田　茂弘）
石器時代當初に關する二三の問題　酒詰　仲男
茨城縣筑波郡小姓及所謂十和村眞木遺蹟について　篠遠　喜彥
群馬縣鬼石町周邊の遺蹟　櫻澤　重利
考古學集刊　三（十一月）
相模五領ヶ台貝塚調査報告　江坂　輝彌
尾張西志賀遺跡調査概報　杉原　莊介
上總能滿寺古墳發掘調査概報　大塚　初重
佛教藝術　五（十一月）
琉璃瓦の裝飾樣式について　原田　淑人
ショトラックの發掘　吉川　逸治
人文研究　一ノ一（十一月）
歐洲に於ける遠古史研究の展開　角田　文衛
日本史研究　11（十月）
瀨戸內海黃島貝塚發掘概報　立命館大學史前學會
史迹と美術　一九八號（十一月）
正倉院建築論再攷　石田　茂作
法隆寺五重塔の建築年代（上）　藪田嘉一郎
法隆寺五重塔の建築年代（下）　藪田嘉一郎
同　一九九號（十二月）
法隆寺五重塔の建築年代（下）　黑田　昇義
東大寺二月堂建築考
新日本史講座　第七回（十月）
原始時代の社會と文化　八幡　一郎
日本歷史　第十九號（九月）
原始時代　樋口　清之
人文科學の諸問題　八學會連合編（十一月）
日本の祭祀遺跡　大場　磐雄
法隆寺式忍冬文字瓦　石田　茂作
黑曜石鏃の形質とその分布　渡邊　仁
中國藝術の一側面　關野　雄
アイヌのチャシとロシヤのゴロデ　江上　波夫
イシチエ　島田　正郎
遼代の村落遺蹟
土器及爐跡の熱殘留滋氣について　渡邊　直經
古代稻作技術　八幡　一郎

彙報

史學研究會關係

大會講演要旨　昨年十一月十三日に於ける那波教授講演「唐代の鄰保機構を論ず」の梗概は次の通りである。

唐代の隣保機構を論ず　那波利貞

中國では早くから民家自治組合が生れ、歴朝政府は概ね之を活用して地方民政の執行に資したが、特に隋朝の保制と唐朝の鄰保制とは當時中國全土に實施され、また前者は我邦のそれにも範を垂れた。唐の鄰保の制度は唐令・舊唐書の食貨志職官志資治通鑑に記載があるが、後に述ぶる西陲發見文書を加えても其の量が僅少で、その機構を詳かにすべき他の史料は無い。隋制が保（五戸）、閭（二十五戸）、族（百戸）の組織關係なるに對し、唐制は鄰（四戸）、保（五戸）、里（百戸）、鄉（五百戸）なる組織關係であると傳えている。此の際從來の研究家の間で論諍の主題となり、且つ何人も明快なる解明を與え得ないで居ることは、四戸と五戸という戸數を異にする此の鄰と保との二種の基本組合單位が施行されたとすると、これは如何樣に實施したのか、地域的にでも區別して其の一を施行したのか、また二者と里との機構的關係は如何なりしかという問題である。しかも五戸で一保を組織したことは唐の廣德三年二月の交河縣團保文書五篇の明示せる事實であると共に、四戸で一鄰を組織した傳えも一概に誤ともいえぬ。此の學界多年未解決の問題に對し、一家の新解釋を立てんとするのであるが、新史料は無いので、從來の學者が縱横に觀察考覈した敍上の僅少な謂はゞ專門家の充分檢討批判濟の史料、特に交河縣文書を余の研究眼に照して觀ると、鄰も保も竝び實施されてこそ、はじめて唐朝の民治組織が機構的に成立し、圓滑に運營される。從來の諸史料は悉く正確に其の部分的史實を傳えているもので、文句の誤とか傳寫の謬は無いと考えられる。しかも此の鄰保機構は宋代の學者司馬光などにも既に其の知識が缺けていたやうで、資治通鑑攷異には誤つた議論を載せていると思う。また隋制と異る此の鄰保制は、唐政府の創案ではなくて、隋末割據の群雄中の一國である王世充の國内民政で創案され、唐は全くこれを採用したものであることが、舊唐書の王世充の記載で明確に之を證據立て得る云云。

（講演者手記）

史學研究會（例會）

十二月十三日　於大阪學藝大學

大阪歴史學會と合同で行い、講演終了後地方會員との「史林」を通じての研究交換・史料公開等、史學研究會今後の在り方について種々懇談するところがあつた。講師竝びに演題左の通り。

「中國に於ける土地問題」　北山康夫

「世界史と二つの世界」　前川貞次郎

京大國史關係

小葉田教授着任、西田教授の後永らく欠員のまゝであつた研究室主任教授として、今度東京文理大より小葉田淳教授を迎えることゝなり、昨年十二月着任された。教授は昭和三年京大國史卒業後、永らく臺北大にあつて研究をつづけられ、戰後文理大教授に轉ぜられたものである。著書としては「日本貨幣流通史」・「中世南島通交貿易史の研究」・「中世日

支通交貿易史の研究」等があり、昨年度は「産業史の研究」の講義が行われている。

讀史會例會　昭和廿四年十二月十六日（金）午後一時より京大史學科陳列館會議室にて行う。

一、人文科學綜合學術大會報告　高尾一彦氏

十一月廿四・五・六日東京において「封建遺制」をテーマとして行われた右大會に、研究室より柴田助教授以下數名出席したがその要旨及び今後の問題の所在等につき報告がなされた。次いで學生三君より次の研究報告があつた。

一、不盡言と宣長の文藝論　深江　浩

一、護憲運動からファシズムへ　藤原　剛

一、奈良時代の神佛關係　井上秀雄

民俗學會例會　廿四年十一月十九日（土）午後一時より八坂神社において例會を開催、宮司高原美忠氏が「モノイミ（潔齋）について」と題し、全國約廿社の古風のモノイミ神事についての報告があり、次いで祖靈祭祀の問題に關する會員の座談會を行つた。出席者約十名、四時前散會。

庄園村落の現地調査　庄園村落の構造は庄園文書からは勿論現地に於ける現在並に近世の動向をも考察して、その發展過程を總合的に理解しなければならない。この見解に立つ柴田助教授を中心とする宮川・高尾・黒田・井ケ田等各大學院學生協同研究のグループの中、先ず井ケ田・黒田の二名が、去年十二月初、東寺領若狭太良庄の現狀を探訪した。前後三日間の滞在中、知り得たことは左の如くである。

先ず古文書類については、高鳥定吉氏所藏の天正十六年の「太良庄本帳」と表紙を附した分附記載のある檢地帳、及び天文廿年の目附を有する「本所惣百姓中山縣殿へ指出」の案文以下を發見した。これら及び京大影寫本「高鳥居文書」（現在原本所在不明）等により、東寺文書によつて知り得る中世太良庄と、近世、更に現代の同村の歴史を一貫して跡ずける事が出來るのではないかと思う。特に村内の最大地主であつたと思われる高鳥甚兵衛家の土地所有について、近世初期から現在に至るまで連續して跡付け得る事は興味深い。併しながら、今度の調査は全く準備的なものにすぎなかつたのであり、本格的調査は近々に行う豫定である。

更に本年初頭一週間にわたり、柴田助教授・宮川・高尾の三名は、備中國新見庄と播磨國矢野庄の實地調査を行つた。

新見庄では降雪のため足を奪われ十分の成果を得なかつたが、この地域が出雲・但馬・備前に通ずる交通の要衝に當り、そのため早くから商業が浸透して主要交通路沿いの町や村落の構造關係に甚しい影響を與えている。この點は、同じ庄内でも交通路から遠ざかつた村落では見られぬのではないかと考えられるようである。右の推定を檢討することが今後の課題であるが、その資料として、新見町役場及び林李次郎氏所藏の元祿八年の檢地帳以下村明細帳・宗門帳等がある。

次に矢野庄では比較的天候に惠まれ、又宮川の既に二回に及ぶ調査によつて在地資料の大様が判つて居り、萬事好都合であつた。この地方の主な近世資料には相生市役所・那波會所・佐方の慈眼寺・那波鐵治氏所藏（以上相生市）・若狭野村役場・米澤武雄氏所藏（以上若狭野村）・有年村役場・楢原・原共有（以上有年村）・矢野村役場・小林楓村氏蒐集所

藏（以上矢野村）等の文書記錄があり、又地方史家には有年の醫學博士松岡秀夫氏・矢野の小林楓村氏等が居られる。矢野庄の庄園村落には三つの相異つた類型が認められる。㈠は相生・那波を中心とした進んだ地域で、こゝでは地方（じかた）構造に於ける先進性と共に、更にそれに、漁業・廻船・播磨造船所等を中心とする浦方の構造關係が交錯した複雜な特殊性が見られる。㈡は少し遲れた地方（じかた）構造を示す若狹野村を中心とする庄の中央部である。㈢は矢野村を主とする北部地域で、こゝでは地主と出入（でいり）の關係が殘り農業經營も比較的遲れている。

以上の準備的調査によつて得た基本的構造關係の荒削に基ずいて、諸資料の綿密な吟味と比較考察による總合的な研究が、近い將來に於て期待されている。

京大東洋史學關係

東洋史談話（例會）（京都大學史學科演習室）

十一月二十一日　午後三時　池田　誠

「本草について」

東洋史研究會（例會）（人文科學研究所會議室）十二月八日　午後一時　「中國近世に於ける生業資本の貸借について」　宮崎　市定

「清代に於ける鹽業資本について」　佐伯　富

一月十四日　午後一時　「中國近代史への方法論的序說」　北村　敬直

「清代製鹽に於る問屋制の發展」　波多野善大

（何れも「東洋史研究」次號に發表豫定）

京大西洋史關係

西洋史讀書會では、學生を中心に隔週一回月曜日に發表會を開催し、概ね卒業論文に關係する研究發表、論文紹介を行いつつあるが、昭和二十四年十月以降の發表者及び紹介論文左の通り。

H. Sée ; Que Fant-Il Penser de Louvere Economique de Colbert?　西田溫彥

H. Woeffiin; Italien und das deutsche Formgefühl.　濱田忠彥

A. Toynbee; The industrial Revolution of the 18th Century.　橋本興志

J. Strieder; Studien zur Geschichte der kapitalistische Organisationsformen.　磐田四郎

Bury ; History of Greece vol. I.　杉原康弘

Wright; Feminism in the Greek Literature.　齋藤　統

尙終了後は出席の研究室關係者、學生の間で質疑應答、討論を行い、併せて發表者の指導をも目的としている。

京大地理學關係

地理學教室秋季旅行。

十一月八日京都出發。南紀、熊野方面を見學、十二月歸學。參加者織田助教授、藤岡助教授、辻田奈良女子大助教授以下二十名。箕島附近で蜜柑山見學中より降雨を見、二日間雨になやまされたが、以後晴天にめぐまれ、白濱附近の漣痕や、紀州沖のさんま漁業、新宮

市の復興狀況等を見學、相當の成果を收めた。

地理學談話會

十一月十五日本年度大會を開き、九月以降毎月一回例會を行つている。

昭和二十四年度談話會大會。十一月十五日人文科學研究所本館。參會者約百五十名。研究發表題目左の通り。

開會の辭。　吉田　敬市

アメリカ的都市の形成　木地　節郎

京都中央市場に於ける水産物集荷の地理學的研究　中、　修一

房總半島の稻米儀禮　石川　榮吉

我國に於ける商港的構造に關する地理的研究—大阪港の海運出入貨物を中心に—　細井　淳一

カール・リツターにおけるフイジオグノミークについて　岩田　慶治

南ドイツにおけるステツペン・ヘイデとゲヴアン集落との關係　水津　一朗

近世における西濃水運　海運　一隆

貨物輸送から見た地域構造　春日　茂男

スペインの灌漑　松田　信

最適分布について　川喜多二郎

コンミユニテイについて　石田　寛

站赤と清代馬驛（その交通量について）　河野　通博

東北地方冷害率の分布について　淺井　辰郎

輪中地域における生活の一形式—　兼子　俊一

大野川下流高田村の場合—　米倉　二郎

佐賀平野の綜合開發　宮川　善造

ソ聯における勞働力の配置　村松　繁樹

竹　島　考

海岸地下水に關する一二の問題　速水頌一郎

閉會の辭　織田　武雄

十一月例會（十一月五日。地理學實習室）

1　四國水産業調査旅行談　吉田　敬市

十二月例會（十二月十日。地理學實習室）

1　復興期にある遠州機業型態の地理學的研究　細井　淳一

2　A・フオン・フンヴオルートの青年時代　岩田　慶治

小野鉄二元講師の死去

元本學、臺北大學、廣島文理大講師、元廣島高等師範學校教授小野鐵二氏は昭和十八年以來病床に臥していられたが、原子爆彈による負傷以後病狀次第に惡化し、十二月八日江田島に於て死去せられた。享年五十四、氏は本學經濟學部卒業後、文學部に入學、地理學を專攻せられ、西洋地理學史の權威として令名高かつた。

京大考古學關係

○滋賀縣浦生郡安土村下豊浦干拓地遺蹟發掘

日本考古學協會繩文文化會の主催の下に十一月二日から翌月中旬にかけて、安土村小内湖々底の繩文式遺跡の調査が行はれたが、東大山内講師他二名に對し、關西からも京大藤岡助教授、大阪市大角田助教授他京大考古學教室員が參加して協同調査がなされた。遺蹟は終戰後干拓された元湖底に沈んでゐた所であるが、繩文式文化の早期・前期・中期の極めて變化に富む遺物を出し、遺蹟の少い幾内に於ける繩文初期文化の解明に新たな知見を加えるものとして注目される。特に玦狀耳飾管玉勾玉類の豊富な出土は單なる包含層からの出土である丈に珍らしいものであつた。

大谷大學史學關係

東洋史・支那學研究室

中國文化同好會例會　十二月十五日　午後三時　於會議室

公開講演

「中國古代の宗教」　貝塚茂樹

講演後、質疑應答、座談會を行う。一般來聽者多數ありて、盛會であつた。

國史・國文學研究室

史學大會　十一月十九日　午後一時　於第一教室

開會挨拶　本學　藤島達朗

紀行文學の展望　本學　岩見護

北陸門徒の關東移民に就て　高野山大學　五來重

最近の革命的國史觀に就て　本學　三品彰英

大會終了後、會議室に於て、各講師を圍み、座談會あり。出席者、高野山大學教授・國史學會先輩・學生・一般來聽者等、約五十名。

佛教史學研究室

京都博物館見學　十一月十日　午後二時

公開陳列中の「舍利容器と鎮壇具」展を見學、法隆寺佛舍利容器の公開、非公開兩說の喧々たるとき、日下教授の說明を得て、感深きものがあつた。

雲華院大舍師百回忌記念講演會及遺墨展

十二月三日　自九時　於講堂及會議室　眞宗大谷派雲華院大舍講師(一二四三―一五二〇)百回忌にあたり、記念講演並に遺墨百數十點を展觀。午後一時より講堂に於て法要、引續き左の講演あり。

頼山陽と雲華　神田喜一郎

雲蓋院の行蹟を偲びて　日下無倫

講演後、茶話會、內外多數の參列を得て頗る盛大であつた。

史文會

第五回例會　十一月十七日　午後三時　於會議室

道藏の文學について　中田勇次郎氏

第六回例會　十二月十四日　午後三時　於會議室

日本淨土教始源の問題　藤島達朗氏

支那學會（例會）

（京都大學史學科演習室）

十二月十一日　午後一時

ライシャワー教授寄贈新刊書紹介展示會

Y. R. Chao & Lien-sheng Yang: Concise Dictionary of Spoken Chinese.　伊地智善繼

Owen & Eleanor Lattimore: China, A short history.　吉川幸次郎

H. F. Mac Nair: China.　前野直彬

Wittfogel: History of Chinese Society.　田村實造

Eberhard: Das Joba-Reich Nord China　藤枝晃

Creel: Confucius.　貝塚茂樹

京大人文科學研究所關係

研究發表會

十一月十九日　午後一時

於同研究所本館講堂

一、日本勞働運動の特質　渡部徹

一、中國東西論　日比野丈夫

一、古代思想史における「社會と個人」

の問題　杉之原壽一
一、里老人制以前の老人制　小畑　龍雄
一、現代社會調査の主要問題　森口　秉二
一、長安の寺塔と壁画　長廣　敏雄
桑原武夫所員開會の挨拶を兼ね昨秋アメリカより訪日の人文科學顧問團による報告書の内容を紹介し、次いで右の様な研究發表が行われた。尚ほ同時に中國歴代各地の石刻の壁画托本が豊富に陳列された。

常設人文科學講座　第一期　十一月二日より十二月二十一日迄毎水曜午後四時より同右講堂で左の如く行われた。
一、ヨーロッパ膨脹史論(一)(二)　前川貞次郎
一、近代市民革命と諸階級　河野　健二
一、明治維新解釋の諸問題　坂田　吉雄
一、邊疆王國—中國長城地帶の政權—　藤枝　晃
一、王陽明の背景(一)(二)　島田　虔次

東方學術協會關係

京都例會　於京大人文科學研究所
十月三十一日（月）
中共の科學政策　阿部良之助

大阪例會　於大ビル三六一號室
十二月十五日（木）
中國思想と現代　木村　英一

人文科學委員會關係

第二部（史學）學術大會　昭和廿四年十月八日・九日、於九州大學
主題「都市と農村」「文化交流の問題」

第一日　十月八日　都市と農村
アジア的封建制に於ける農村とギルドの構造分析　廣島大學助教授　今堀　誠二
中世都市の社會構成　九大教授　今來　陸郎
古代の農村　九大教授　竹内　理三
明代鄉村組織の二型—浙江海鹽縣を中心として　京大助手　小畑　龍雄
封建都市の成立　東北大教授　豊田　武
近世農村の都市化　熊本大教授　原田　敏明

第二日　十月九日　文化交流の問題
文化交渉より見た原始クリスト教　京大教授　井上　智勇
廣開土地好太王壺杆を出した新羅の墳墓に就いて　前京城大講師　有光　教一
ウォードの天才論とヨーロッパ思潮　九大教授　小林榮三郎
通古斯族の發展とシナ文化　〃　日野開三郎
説法傳播の一例　東大教授　村川堅太郎
日清戰爭後に於ける日華の文化交渉　九大教授　鈴木　俊

總合學術大會　昭和廿四年十一月廿四・五・六日　於東京上野日本學術會議講堂
共通課題　「封建遺制」

第一日　（十一月廿四日）
(一)昨年度大會課題との連繋について—絶對主義における「强力」と經濟構造—　東大社研　高橋幸八郎
(二)土地所有
農地改革後における封建遺制の問題　土地制度史學會　塙　遼一
日本農村の封建制の本質　東大社研　大内　力
(三)政治組織、法的意識
日本人の法意識　早大　戒能　通孝
(四)宗教、文化

宗教集團における封建遺制の問題　東大東洋文化研究所＝小口　偉一
教育における封建遺制の問題　東　大　宗像　誠也
習俗（Sitte）における封建遺制　東京文理大　和歌森太郎

第二日　（十一月廿五日）

(五)資本と勞働
賃勞働關係における封建制　東　大　隅谷三喜男

(六)家　族
家族における封建遺制　東　大　福武　直
同族組織を通じてみられる封建遺制　九　大　喜多野清一
家族構成の面からみた封建遺制　C・I・E　小山　隆

(七)東洋社會における封建遺制
封建遺制と中國　京大人文科學研究所　天野元之助
中國の資本　〃　安達　生垣
立　命　大　旗田　巍
封建遺制の地理的考察　早大　中島　健一

第三日　（十一月廿六日）

(八)總括討論

會員消息

○小薬田　淳氏　昨臘東京文理大教授より京大教授へ轉任
○小畑　龍雄氏　山口大學助教授として一月赴任
○宇都宮清吉氏　名大教授へ轉任
○外山　軍治氏　大阪外大教授に就任
○荒木　敏一氏　京都學藝大學助教授へ轉任
○宮川　尚志氏　岡山大學教養學部教授へ轉任
○波多野善大氏　名大助教授へ轉任
○大島　利一氏　奈良女子大助教授へ轉任
○林　章氏　名大文學部助手に就任
○中山　治一氏　名古屋大學教授に轉任
○前川貞次郎氏　京都大學助教授に就任（人文科學研究所勤務）
○村田數之亮氏　大阪大學教授に轉任
○松井　武敏氏　名古屋大學講師を兼任
○松田　信氏　三重大學亀山分校講師に就任
○内藤　玄匡氏　神戸商業大學助手に轉任
○中山　修一氏　京都女子大へ
○鳥谷　通宏氏　長崎大學學藝學部講師に就任

（附　記）――八七頁より續く――

終戰以來既に四歳を過ぎその間虚脱の態にあつた學界が漸く立直りをみせたというよりは寧ろ、戰時中におさえられていたこの方面の活動が一時に解放されて各地各方面の研究が開始された。そのさまは花やかなものではあつたが又一面秩序なく跛行的であつたというそしりをまぬがれ難い。しかしその凡ゆる業績をこの限られた紙數に錄することは到底許さるべくもないので、問題の取り扱い方や個々の論文の取捨については各執筆者の自由にまかせた。從つて全體としての統一を欠く點は御容赦願いたい。なお予定していた朝鮮中國台灣關係は都合によつて次號に廻さざるを得ないことも甚だ申譯けない次第である。

編輯後記

國史、東洋史、西洋史、地理學、考古學の各分野において、夫々專門の研究雜誌が發刊

せられた現今の學界の情況において「史林」の如き各學科の綜合雜誌の存在すべき餘地が果してありや否や。思うに、國史、東洋史、西洋史等の研究論文が、常に世界史的立場を背景に書かれていることはいうまでもないが、併し、具體的に一つの世界の歴史事象の意義を眞に理解するためには、やはり、他の世界の類似の事象を捉え、これと比較し、乃至はその事象との聯關を辿ることによつて始めてなしうる所である。かゝる意味において『史林』の如き綜合雜誌は國史、東洋史、西洋史等の如き各專門雜誌の企画しえない編輯方法も可能なわけである。即ち、ある一つの歴史事象について、夫々、各分野の歴史的視角から、同一の問題を究明することによつて、そこに始めて各世界における同一問題の聯關性と特殊性とが具體的に明らかにせられる。本號はかゝる立場から『古代の都市國家』の問題をとりあげ、各專門家の立場から、夫々問題を提起して戴いたもので、吾々の企圖する編輯方針も若干充足せられたものと信ずる。

因みに、本號執筆の宮崎市定博士は、いうまでもなく、京大東洋史學科教授、中原與茂九郎氏は廣島大學西洋史學科教授、横田健一氏は關西大學教授、藤岡謙二郎氏は京大助教授である。

尚、學術雜誌は單に研究論文を掲載するのみならず、學界の情勢動向をも讀者に報告する義務がある。かゝる點では、從來「史林」はその義務を充分に果しえなかつたのに鑑み、今後はこの使命をも十二分に達成するために、月刊として再發足することになつた。たゞ本年は準備の都合で、その實現は困難であるから、現在は隔月刊の方針を以て計画を進めている。讀者諸賢の御期待と御聲援とを切望する次第である。

（佐伯富）

1950年4月1日印刷
1950年4月5日發行

史林　價80圓

京都市左京區吉田本町
京都大學文學部内
編輯　史學研究會
代表者　佐伯富
印刷者　大日本株式會社
京都工場
大阪市東區南新町一ノ六
發行　教育タイムス社出版部
代表者　岸本貞三郎
振替大阪七一九二〇